

天文民俗調査報告(2014年)

北尾 浩一*

概要

2009年より天文民俗調査報告を開始してから6年目となった。ますます調査は困難になっていくが、日々の暮らしのなかで形成された日本古来の伝統的な星名伝承を記録することができた。主な成果は次の通りである。

・宮城県気仙沼市において、星が登場する甚句「ムヅラボシの歌」「柄杓星の歌」を記録することができた。

・北海道、青森県においてイカ釣りの役星について記録することができた。

2014年においても新たな発見があり、天文民俗調査の重要性はますます増大している。

1. はじめに

1978年、新潟県佐渡郡相川町姫津(現 佐渡市)より星の伝承の調査をはじめてから37年目になった。調査を実施した地域は、「北海道」「東北」「関東」である。

2. 調査の概要

2-1. 調査方法

漁業に従事した経験を持つ高齢者(おおむね昭和15年以前の生年)を中心にインタビュー調査を行なった。最も高齢の伝承者は大正12年生まれ、最も若い伝承者は昭和23年生まれであった。なお、星名とともに年中行事(七夕、十五夜)についても調査対象とした。

2-2. 調査地

2014年は、次の20箇所で見聞した星名伝承の記録を行なうことができた。

- ・2月…宮城県気仙沼市四ヶ浜鶴ヶ浦、四ヶ浜梶ヶ浦、大島駒形、大島高井
- ・6月…青森県東津軽郡外ヶ浜町三厩龍浜、三厩上宇鉄、三厩釜野澤
- ・7月…神奈川県横浜市神奈川区子安通
- ・10月…北海道稚内市宗谷村富磯、恵比須、礼文郡礼文町船泊村南高山、船泊村江戸屋、香

深村、利尻郡利尻富士町鴛泊、鬼脇、利尻町仙法志元村、杓形栄浜、積丹郡積丹町日司町泊、幌武意町

- ・11月…神奈川県横浜市鶴見区生麦

3. 各地域の星名伝承

2014年に各地域で記録した星名伝承の概要は、以下のとおりである。

3-1. 北海道

礼文島、利尻島、積丹半島の調査を実施した。

(1) 北海道礼文郡礼文町船泊村江戸屋

ウヅラボシ(プレアデス星団)の出をイカ漁の目標にしていた。

「ウヅラボシと昔の人は言ったようじゃったけどな。七つくらいかたまったクチャクチャと出るやつある。あの星が出てくりヤイカつくとか。水平線からね、出てくるとイカついてくるとかやったもんだ」

「ウヅラボシあがってきたからイカつくぞ、とか言ったもんだね。潮が変わってくるのでねえか…」

「ウヅラ豆てのあるね。なんかね小さい豆でね。なるほどあの豆を表現して言ったのかね。あんまり大きな星でないけどピカピカッと光ってクチャッとかたまってる」(話者生年、大正12年)

(2) 北海道礼文郡礼文町香深村

メシタキボシ(明けの明星)、ウヅラボシ(プレアデス星団)、サンコウボシ(オリオン座三つ星)の出を、イカ漁の目標にしていた。

*中之島科学研究所
kitao@kagaku-shinko.org

「メシタキボシ、明るい星、上がってる。はやくに、まだ暗いうちにね。それをメシタキボシとか言って、そういうのを丹念して。いま出てくるから潮が変わるって、そういうものを丹念して。ひとつの星、メシタキボシ。メシタキボシ、飯炊きに起きた。ご飯をたくのに、昔、住み込みで、若い衆が…」

「サンコウボシ、いまでも三つあるよ。サンコウボシは、早く出てるな。三つ並んで出ると」

「ウヅラボシとか聞いた。ウヅラって、鳥の鶉の卵のようなもんなのだべさ。鶉の卵のようにたくさんこまい明かりがかたまってる」(話者生年、昭和8年)

(3) 北海道利尻郡利尻富士町鬼脇

9月～10月、宵から始めたイカ漁の終わりの時間をスバルボシで知った。

「スバルボシ、上に来たら宵のイカ、終わりだ。帰るか」

「マスボシ、四角の柵みたいな。待てやマスボシ、駆けつけば(ついてこい、追いかけてこい)スバルボシ」

マスボシは、オリオン座三つ星と小三つ星とη星。マスボシがスバルボシに待ってくれと言うと、スバルボシは追いかけてこいと言ったのである。

七夕について、次のように伝えていた。

「ローソク出せ出せよ。出さねばかっやくぞ、と青年団のような人が歩いて、お酒とかご祝儀をもらって歩いた」

十五夜のぼた餅は、もち米を半分しかつかないで粒を残しているので「半殺し」と言った。全部ついてしまう大福は、皆殺しと言った。

「十五夜様、ススキを立てて、ぼた餅(おはぎ)をあげた。半殺しをあげた。ぼた餅のことを半殺しという。もち米を半分つく。おはぎのこと」(話者生年、昭和5年)

(4) 北海道利尻郡利尻富士町鬼脇

樺太出身で、樺太内幌の七夕について伝えていた。「提灯を持って二、三人で歩いた。柳の木に天の川とか短冊をつけた。柳の木は持って歩かない」

また、「たなばたまつりロウソク出せよ、出さねばかっやくぞ」と歌いながらローソクをもらって歩いた。

(話者生年、昭和5年)



(5) 北海道積丹郡積丹町幌武意町

ウヅラボシ(プレアデス星団)の出を、イカ漁の目標にしていた。ミツボシ(オリオン座三つ星)は、目標にしなかった。

「星、ミツボシとかな、なんだったかな、こっちのほうでる星。ウヅラボシって言ったかな。東の空にね、出るんですよね。ウヅラボシとかね。学校終わるとすぐ漁師やってね、おやじと二人でね。小さい磯船で、イカつけに二人で乗ってね」

「ウヅラボシって、11時頃、東の空からあがってくる。かたまって、三つか、四つ、かたまってあがってくるの。海から。その星があがってくる頃に、イカがつきだしてくる。その星があがってくるまで起きてるの。豊漁のときはすぐつく。漁のない日もあるから、その星のあがるまで待つて」(話者生年、昭和9年)

3-2. 東北

青森県、宮城県の調査を実施した。

(1) 青森県東津軽郡外ヶ浜町三厩龍浜

星を時間の目標にした。星の出にイカが釣れるわけではなかった。

「時間は、アサノミヨージョーとかそういうのを見てね、ナナツボシのなんというか北斗七星の傾き具合いね。星を見て…。ナナツボシ、白神の上。北、福島(渡島福島)より右の方」

「スバリボシ、マスボシ、東。ヨアサか、だいたい夜明ける時期だものね。ヨアサに出る、だいたい7月か8月頃だね。あつたかい頃ね。スバリボシ、マスボシ、つくまでね、朝は、出てくるまでイカつけしたもんだよね」

「7月か8月頃、ヨアサまでイカ釣りをしているとスバリボシ、マスボシが出てくる。スバリボシ、マスボシが出てくるまでイカ釣りをしている。スバリボシ、マスボシの出にイカが釣れるわけではない」(話者生年、昭和6年)

(2) 青森県東津軽郡外ヶ浜町三厩上宇鉄

シバリ(プレアデス星団)、ツリガネボシ(アルデバランとヒアデス星団でつくるV字形)、マスボシ(オリオン座三つ星と小三つ星とη星)の出をイカ漁の目標にしていた。6月、明け方にシバリののぼる頃からイカ釣りの季節になった。曇っていたときも星の出の頃に釣れた。

「よく丹念してやったんだけど、昔の人は。マスボシは、ほんとうにこういう格好なんですよね。だいたいこの星が出てくれば、潮がひくとか。マスボシ、ツリガネボシってね」

「シバリ、こまく(小さく)ね、こういう格好で出る星もあるのですよ。鍵になったような。ここに星あって、ここにも星あって、これね、わりとこまかく、こっちの星(マスボシ、ツリガネボシ)よりずっとこまく見えるのですよね。こういうの出るとき朝イカつくですよ」

「ついてきた思ったら、自然現象が変わっている。マスが出てきたり、ツリガネが出てきたり…。曇りのほうがよい。曇って見えないけど関係あると思ってきました。釣れる頃は、星の出る頃…」

(話者生年、昭和6年)

(3) 青森県東津軽郡外ヶ浜町三厩釜野澤

シバリ(プレアデス星団)、マスボシ(オリオン座三つ星と小三つ星とη星)の出、月の出、月の暮れをイカ漁の目標にしていた。

「いまついてきた、シバリのあがったとか、マスボシが上がったとか。月の出もありました。月の暮れもあります。暮れを丹念すると潮が変わってくる。流れがゆるやかなったそのときがイカが一番」(話者生年、昭和9年)

(4) 宮城県気仙沼市大島高井

ムヅラボシ(オリオン座三つ星と小三つ星)、柄杓星(北斗七星)の甚句が伝えられていた。

「ヨイヨイトナ、ムヅラボシでも、は一、横にはなるが一。 わたしやあーなーたと、こりやほんとにいつ横に一、あーヨイヨイトサ」

楽譜 ムヅラボシの歌 採譜者 北尾正子

「ヒシヤクボシーでも、ありやこりや水く〜むわざい(こよい)、わたしはあなたとありやほんとにいつくめる。あーよいよい、よいとさ、すつけたもつけた、たまげた。たまげたところから子がでてきて、その子もやっぱりたまげた。とこやっさいやっさいな」(話者生年、昭和2年)

楽譜 柄杓星の歌 採譜者 北尾正子

(5) 宮城県気仙沼市四ヶ浜梶ヶ浦

自らの経験ではなく、ムヅラ(オリオン座三つ星と小三つ星)の出をイカ漁の目標にしていた話を伝え聞いていたケースである。その他、モクサボシ(プレアデス星団)、ナナツボシ(北斗七星)という星名を伝え聞いていた。

「昔の人は言ったのですよね。星の出とかね、月の出、月の入りとかね、潮のかげんがあるんでねえの」「ムヅラってのはね、星、晴天のとき、三つこう並んで、また三つ、斜めに。ムヅラの出だ、ムヅラの出だ、という話を聞いた。星の出でイカもつくときあるんではねえの」(話者生年、昭和8年)

3-3. 関東

横浜市子安及び生麦の調査を実施した。

(1) 神奈川県横浜市神奈川区子安通

昔、穴子を取ったとき、オオボシ(明けの明星)で夜明けが近いことを知った。

「でかい星、上がる。オオボシ。じき、夜が明ける。穴子、網に入る。昔は底引き網。車エビもたくさん入った。オオボシ、きらきら光ってるよね」(話者生年、昭和14年)

(2) 神奈川県横浜市鶴見区生麦

伝承という形態で習得したナナツボシは、学校では北斗七星と教えられた。

「星はね、やっぱり、外へ出たときに、川から出たときに。ナナツボシだけどね。いまやたらに明かりがあるでしょ。だから場所いうか、山いうか、山が見にくいのですよ。」

ナナツボシ、こうなって、柄杓、杓文字、こうなってるでしよ。ナナツボシと教わっただけどね。言い伝えで。七つある。どこから数えて七つだか。あれがナナツボシだ、と言って。学校ではナナツボシを北斗七星」
(話者生年、昭和9年)

4. 特筆すべき星名伝承

4-1. ムツラ、ムツラボシ

ムツラボシ(六連星)は、一般的にはプレアデス星団のことであり、ムツラ、ムツラ(六連星)の系統の方言は、北海道、青森県、秋田県、茨城県、群馬県等、東日本に広く分布する。しかし、オリオン座三つ星と小三つ星を意味するケースがあり、野尻抱影氏は、「くむつら」は、江戸の《物類称呼》以来、すばるの異名だが、これをくおくさ」とよぶ東北地方では、三つ星と小三つ星を併せた六つの星をくむづら」といい、またオリオンの総称にも用いている」と記している。(野尻 1973)

青森県、岩手県、宮城県において、プレアデス星団ではなくオリオン座三つ星と小三つ星を意味するケースが伝えられている。(北尾 2001) 本調査においても、気仙沼市四ヶ浜梶ヶ浦、大島においては、オリオン座三つ星と小三つ星を意味した。

4-2. 星の俚謡

2014年の調査において、宮城県気仙沼市において、ムツラボシと柄杓星の俚謡(甚句)を記録することができた。また、北海道に広く歌われている「ローソク出せ…」が樺太においても歌われていたケースを記録することができた。

科学知に対して、星名伝承という生活知を本調査では対象としている。現代の様々な問題を解決して、よりよく生きていくにあたって、過去の生活知のなかに人間の経験し学ぶ力を明らかにすることは、専門家と一般市民の異なる立場からの科学技術への理解と発展を実現していくにあたって大切なことである。その星名伝承のなかでも、俚謡として表現したことの意味は、次の四点になる。

- ①星の知識内容の習得の徹底、共有化。
- ②生業にかかわる行動の徹底。
- ③人間としての表現、文化の創造。
- ④歌を通しての世代を超えた継承の実現。

1978年より実施した調査において、次の俚謡の音声記録することができた。

・ミツルブシの歌(鹿児島県大島郡大和村)(北尾 2002)

・ナナツブシ、スブシの歌(鹿児島県大島郡大和村)(北尾 2002)

・ナナツボシの歌(大分県宇佐市安心院町)(北尾 2013)

・スマルの歌(愛媛県越智郡上島町魚島)(北尾 2001)

・スマルの歌(山口県防府市野島)(北尾 2013)

・月とスマルの歌(兵庫県たつの市御津町室津)(北尾 2001)

・スバルの登場するショメ節(東京都八丈島八丈町)(北尾 2014)

・ムツラボシの歌(宮城県気仙沼市大島)

・柄杓星の歌(宮城県気仙沼市大島)

気仙沼市のムツラボシの歌は、ムツラの明るい三つ星のほうで最初は縦に並んでいるのが高度を上げて横になっていく様子を見て、自分はあなたといつ横になれるのかと想い歌ったのであるが、東の空では縦に、高度を上げて南の空で横に並んで輝くという観察に基づいたものである。同様に、スマルの歌は、一箇所にかたまっている様子を海の海老とともに歌い、月とスマルの歌は日周運動を歌っている。

「星を歌う」という営みは、単に星が生活技術としての存在にとどまるのではなく、星と人とのかかわりの文化としての厚み、豊かさをも備えたものであることを示している。

5. おわりに、

本調査を実施するにあたっては、北海道積丹郡については北海道大学の福澄孝博氏、宮城県気仙沼市については、ひが企画の比嘉義裕氏をはじめ、多くの方のご協力をいただくことができた。また、ムツラボシと柄杓星の甚句については、比嘉義裕氏によってビデオ映像として記録することができた。紙面を借りてお礼を申し上げます。

参考文献

野尻抱影:1973, 日本星名辞典, 東京堂出版

北尾浩一:2001, 星と生きる, ウインかもがわ

北尾浩一:2002, 星の語り部, ウインかもがわ

北尾浩一:2013, 大阪市立科学館研究報告第23号, 天文民俗調査報告(2012年), 大阪市立科学館, 43-48

北尾浩一:2014, 大阪市立科学館研究報告第24号, 天文民俗調査報告(2013年), 大阪市立科学館, 53-56